

第1部創作昔ばなし

佳作

不動堂守り

福島千佳

奈良の二上山のふもとに、「風の杜」という小さな村があった。たった十六の家族だけしかおらん静かな村じゃ。

そこに、ふう太という身体の大きな青年が暮らしておる。病気がちだったおっかあは、ふう太が生まれてすぐに亡くなった。おっとうは山の向こうに稼ぎに行くもんで、十日に一日ほどしか帰ってこない。ふう太はいつも、ひとりで家の留守番をしとった。

しかし、さみしくはなかった。ふう太の家の隣には、不動堂守りのばあさんがひとりに住んでおって、そのばあさんは、そんなふう太を不憫に思っただけで、まるで息子のように毎日世話してくれとった。

ばあさんの家は不動堂の脇の小さなあばら家

だ。ばあさんは年中、毎朝毎夕、雨でも嵐でもお不動さんを掃除して、お供えをする。そして手を合わせ、村の平穏を祈っておった。村の衆は、ばあさんのことを、「不動堂守り」と呼んでいた。不動堂の中には、鬼のような顔をした不動明王が鎮座し、お不動さんと呼ばれ、村の守り神として崇められとった。

「不動さんは、人々を救う強い決意を揺るがさないから不動、ていうんや。風の杜を守る大切な存在じゃ。ほれ、ふう太も手を合わせて祈らんか」

ふう太は、不動明王さまの、その燃えるような目が怖くて、いつもぎゅっと目を閉じたまま手を合わせ、逃げるようにその場を立ち去っていた。大きな身体をして、肝っ玉の小せえふう太の、そんな様子がおかしく、ばあさんあは「かっかっか」と笑っておった。

さて、ふう太は十五歳になった頃から、髪を伸ばし始めた。髪が伸びると、今度は赤や黄の着物を欲しがるようになり、おっとうに頼んだ。おっとうは、いつも寂しい思いをさせとるふう太が欲しがるならばと、赤や黄の着物を買ってやった。

ふう太の姿は、大男のくせに女の格好をした、変り者として、村の衆たちの話題の種になった。しだいにふう太のことを、陰で「化けおなご」と呼ぶようになった。そんな人間は、いままで風の杜にはひとりもおらんかったから、まるで変人扱いじゃった。「ありや嫁こ来るどころか、だーれも近づかないようになるぞ」「風の杜の恥じゃー」「親が育てないと、おかしな人間に育ってしまうやな」「男は男らしくせんなんのにのう」

ばあさんも、最初こそ驚いたが、ふう太の優しい性格をよく知っていて、それはまるで女の子のようだし、なにせふう太は、「ははなし子」。きつと母が恋しくて女の格好をしとるんだべと、ふう太をかわいそうに思い、何も言わなかった。

そして、ふう太のことを「化けおなご」と、からかう村の子どもたちに、竹ぼうきを振り回し「こらー！」と追っ払った。ばあさんの言葉に、ふう太は心から救われた。

「ふう太がそうしたければ、したらいい。よかよか、けっこう似合うとるやないか。お前らしく生きたらええ」

ある夏の日。大雨が続き、二上山の一部が山崩れを起こしかけていた。大きな木が何本もなぎ倒され、危険を感じた村の長老は、家々を回り、ふもとから一番離れた家に集まるように声をかけた。

おつとうが不在だったふう太は、ばあさんの家で過ごしていた。ばあさんは、「不動堂を守るのはわたしの役目だ」と、その場を動かない。長老は困った表情で頷くと、次の家に行ってしまった。ふう太は、ばあさんとここに残ろうと心に決めた。

ゴロゴロと向こうの山に雷が落ちる。風の音と雨の激しさで、ふう太は眠れなかった。ばあさんも同じように眠れなかったようで、夜中にむくつと起き上がると、湯を沸かし、ふう太にも白湯を淹れてくれた。「ふう太、大丈夫だ。怖くないぞ。それ飲んでらゆつくり寝え」

すると、裏山の方で「バリバリ、バリバリバリー!!!」

と木が倒れる音がした。ばあさんとふう太は外に出てみて驚いた。

「山が、たいへんなことになつとる！」

目の前の山が崩れて、不動堂に迫ってきていた。大きな石がごろんごろんと音を立てて転がり、木々がずるずるとなぎ倒されていた。

ばあさんが不動堂の方に走っていきこうとした。ふう太は、ばあさんを家の中に突き飛ばし、不動堂に向かって走って行った。腰を抜かしたばあさんの、ふう太を呼ぶ叫び声が、後ろから雨の音とともに聞こえてきた。

ふう太は走った。赤い着物の裾をまくり上げ、まるで不動明王の目をして、駆けた。「不動堂を守るれるのは自分しかない」と思った。雷がまた山の向こうに落ちた。

翌朝。

風の杜の人々は驚いた。不動堂のすぐ横に、人間の二倍もある大きな石が、誰かの手で止められたかのように転がっていた。不動堂は傷ひとつなく、変わらぬ姿のままだった。ばあさんが、恐る恐る不動堂の中に入ると、不思議なことに不動明王には、ふう太が着ていた赤い着物がぐるぐると巻かれており、こちらも傷ひとつなく鎮座していた。

昨夜、ふう太が走って行ったあと、ばあさんの家の一部は土砂で流された。朝になって、柱の隅で気絶していたばあさんは、見回りに来た村の衆に助けられた。目が覚めて「ふう太は？」と、血まなこになって村じゅう探したが、ふう太の姿は見つからなかった。

「ふう太は、わしの代わりに、不動堂を守ってくれたんじや。不動の心でこの村を守ってくれたんじや」

ばあさんは、ひとめもはばかり大きく泣いた。村の衆も、みな泣いた。化けおなごだと、ふう太の悪口を言っていた人たちも、みな泣いた。

「あんなにやさしい子が、あんな恐ろしいことに立ち向かっていった。どんだけ勇気が必要じゃったか。本当のやさしさは、強い心を生んでくれる。人つちゆうもんを、容姿や風采で勝手に決めてはならんのじや。ふう太はそれを証明してくれたんじや」

誰もが出来ないことを、ふう太はやったと、おつとうは、自分の息子を誇りに思うて泣いた。長老たちは、不動堂の横に転がっていた大きな石を

削り、お地蔵さまを作った。お地蔵さまのからだは、ふう太に似せ大きくし、髪の毛長いおかつば頭のお地蔵さまにした。そんなふう太そっくりのお地蔵さまを、村の衆は大切に祀った。

それからというもの、風の杜の不動堂のお地蔵さまは、いつも赤い着物を身に着けている。いつからか、地蔵のさまの頭の上には、赤いりぼんも飾られた。

村の人たちは、今でも、不動堂に手を合わせるときには、決まって横のお地蔵さんにも、「ありがたや」と手を合わせている。